YOSAKOIソーラン祭りの研究
—1999年・2009年の上位入賞チームにみる演舞構成—

A Study of YOSAKOI-SORAN Festival
—About the Dance Composition of the Teams of High-ranking Winning Prizes in 1999 and 2009—

キーワード：YOSAKOI、よさこい、ソーラン、郷土芸能、舞踊教育

平田　利矢子

Ⅰ．研究目的

2009年6月第18回YOSAKOIソーラン祭りが、北海道札幌市内25会場で5日間に渡って開催された。踊り子3万3000人・観客178万7000人を動員し、熱い乱舞が繰り広げられた。この年、筆者が振付したチームが「準YOSAKOIソーラン大賞」を受賞した。

同祭りは、ある一人の学生の発案によるもので他の祭りに比べ「若者」の参加者が非常に多く、新聞・雑誌の中でも「若者」がキーワードとして取り上げられている。又、若者のエネルギーや創造性が、祭りを活気づけているとも言われている。同祭りの参加条件は、鳴子を持って踊ること、曲にソーラン節のフレーズを入れることの2点であり、その他は全て「自由」という踊りのルールが、流行の音楽や身体表現を受け入れながら、生命力溢れる踊りが毎年誕生し、未だ衰えることを知らない。

これまでの伝統的な祭りが「形式」を重んじるのに対し、YOSAKOIソーラン祭りは、実に柔軟性があり、参加者の創造性・独創性が、音楽・踊り・衣装・メイクにいたるまで、個性豊かに反映し創作されている。近年、同祭りの影響を受け、鳴子を内包する祭りが全国各地で展開され、世代を超えた集団が生命力溢れる踊り、躍動感溢れる踊りを展開し、個人個人の可能性・創造性を放出した現場となっている。

筆者は、YOSAKOIソーラン祭りに内包する要因が、近年ダンス教育で言われている「生きる力」「心の教育」「共有関係の中での個性」に通ずるのではないか、又、学校教育・社会教育そして生涯学習への手がかりになるのではないかと考え、YOSAKOIソーラン祭りの研究に至った。

本研究では、このように短期間で急成長した

出典：VOGUE038『NEO JAJANESQUE ～瑞希～』　準YOSAKOIソーラン大賞

写真：第18回YOSAKOIソーラン祭り演舞風景　（2009年 北海道 札幌市）

YOSAKOIソーラン祭りの背景を主に文献から明らかにし、今回は、2009年と10年前の1999年の審査内容・上位入賞チームの演舞構成を比較して考察した。そして、時代的変容を見た。又、祭りの振付に関わる立場から、人々は、今、踊りを通して何を求め・何を習得しているのかについて考察する。

［先行研究］

北海道のYOSAKOIソーラン祭りは創立18年と歴史的にも浅く、同祭りに関する研究は数少ない。北海道のYOSAKOIソーラン祭りの手本である、高知のよさこい祭りの研究に関しては、地理学・社会学・文化人類学的視点から研究されている。これらの分野の研究者達は、若者層の増加、地方都市の社会現象、祭りとイベントという点に着眼し、祭り自体の分析だけではなく、よさこい祭りを取り巻く文化や社会現象も検討している。本研究では、以下の先行研究を基軸に論を展開した。

1.　YOSAKOIソーラン祭りに関する研究

①吉沢友雅（1999）「創られた観光の祭り――YOSAKOIソーラン祭り（特集民族スポーツの伝統と革新～観光人類学の視点から～）」、『体育の科学』、日本体育学会。

吉沢は、北海道のYOSAKOIソーラン祭りがどのように始まり、発展したのか参加者の変動を取り上げている。又、同祭りの企画依頼費の算出、有料桟敷席等を取り上げ、グッツ販売、参加者負担金など、どのように自主財源対策を行なっているか考察している。

②矢島妙子（2000）「祝祭の創造と展開――YOSAKOIソーラン祭り」、『生活学特集番 100年シリーズ都市祝祭の100年』、ドメス出版。

矢島は、“YOSAKOIソーラン祭り”を初めとし、全国的に広がる“よさこい”の形式の祭りに触れ、北海道を中心に各地の“よさこい”の広がりを体系的に把握することを目的に研究を行なっている。

③拙著（2001）「YOSAKOIソーラン祭りの参加者意識考」、Studies Of Dancing 上演学舞踊研究 VOL.2。

筆者における研究は、YOSAKOIソーラン祭りの歴史的背景を明らかにし、YOSAKOIソーラン祭りに向かって、どのような意識を抱いて踊りに取り組んでいるのか、参加者にアンケート調査を行い、YOSAKOIソーラン祭りの参加者意識を考察した。

2.　高知よさこい祭りに関する研究

①内田忠賢（1992）「都市と祭り：高知『よさこい祭り』へのアプローチ1」、『高知大学教育学部研究報告』、第2部第45巻。

祭りの現状に触れ、よさこい祭りの現在を概観し、同祭りの特色となる、人：「踊り子隊」と場：「競演場」に注目し、最後によさこい祭り研究の視角を提示している。

②内田忠賢（1994）「地域イベントの社会と空間：高知『よさこい祭り』へのアプローチ2」、『高知大学教育学部研究報告』、第2部第47巻。

地方都市の高知で行なわれる地域イベント「よさこい祭り」の特質を明らかにし、①祭りの担い手となる社会集団の視点、②祭りの舞台となる祝祭空間の視点、2点の視点で研究を進めている。

③内田忠賢（1998）「地域イベントのゆくえ：『高知よさこい祭り』、『現代風俗学研究』。

よさこい祭りを事例に、①祭りを支える都市の社会組織、②社会組織の背後にある都市の社会関係、の2点に注目し、踊りだけで多数の参加者や観光客を集めている祭りの魅力を探る。

④伊東亜人（1987）「コメント：よさこい祭り、中国・韓国祭りとの比較」米山俊直他『シンポジュウム都市の祭り――都市人類学的考察』季刊人類学18-3。

都市の一つの側面として、都市の祭りを考察している。又、都市の祭りの例として、よさこい祭りを取り上げ、よさこい祭りの歴史及び参加者の特性などを挙げ、都市を構成している住民組織について考察している。

⑤伊東亜人（1988）「よさこい祭り長期ビジョン委員会編」、よさこい祭り振興会。

よさこい祭りの長期的な展望を①運営体制全般の強化確立、②参画する市民側からの盛り立て、③祭りの魅力をもう一段高め観光資源化へつなげる演出、の3点の視点を検討している。

その他、⑥内田忠賢（1998）「よさこい祭りの人類学」、『慶応義塾大学三色旗報告書』、第2部。⑦内田忠賢（1999）「変化し継ける都市の祝祭空間：高知『よさこい祭り』」、米山俊直・和崎春日『都市の祝祭100年』、ドメス出版。⑧内田忠賢（2000）「都市の新しい祭りと民俗学　高知よさこい祭りを手がかりに」、『日本民俗学220』、等があげられる。

Ⅱ．研究方法

1．文献研究

本場高知よさこい祭りは、神なき時代の祝祭空間・行政主体の祭り・都市と祭りとして社会学・地理学・文化人類学的視点の文献があるのに対し、歴史が浅いYOSAKOIソーラン祭りの文献は少ないので、雑誌・新聞・パンフレット・紹介本・調査資料によって補った。

2．VTR分析

VTR分析は、YOSAKOIソーラン祭りの演舞構成の変容を比較対照するため、1999年・2009年YOSAKOIソーラン祭りオフィシャルビデオを用い、両年の上位入賞作品の演舞構成要素の分析・検討を行なった。隊形変化は、一定の時間を保ったものをカウントした。

3．参与観察

第8回YOSAKOIソーラン祭り（1999）と同祭り第18回（2009）の演舞創作過程や祭りに参加し、観察・調査を行った。

尚、筆者は同祭りの第6回（1997）から第18回まで継続して演舞創作と祭りに関わっている。

［語意定義］

1.　YOSAKOIソーラン祭り

北海道札幌市で6月に行われる祭りである。1991年一人の北海道大学の学生が、高知のよさこい祭りを見て、「眠っている若者の力を、忘れかけている開拓精神をもう一度取り戻すことはできないか」[(1)]という願いを込め、1992年（平成5年）から始まった祭りである。北海道のYOSAKOIソーラン祭りは、「よさこい」を「YOSAKOI」と、ローマ字で使用する為、本研究でも「YOSAKOI」とローマ字で、使用する。

2.　よさこい祭り

高知県高知市で8月に行われる祭りである。 高知のよさこい祭りは、戦災の復興と商店街の復興を祈願し1925年（昭和29年）戦後間もない高知市で、市民に活力を与えるために始められた祭りである。高知のよさこい祭りは、「よさこい」を平仮名で使用する為、本研究でも「よさこい」と平仮名で、使用する。

3.　ソーラン節

北海道の郷土民謡で、ニシン漁の作業歌である鰊場音頭の一部であり、漁師が呼吸とリズムを合わせ、作業効率をあげるために唄ったものと言われている。この唄は、船こぎ音頭・網起こし音頭・小叩き音頭・沖上げ音頭と4つの作業過程で構成されている。ソーラン節と言われるのは「沖上げ音頭」の唄で、櫓を漕ぎニシンを大きな網ですくう際に“ソーランソーラン”とかけ声を掛け、唄ったものである。猥談が中心で、特定な歌詞はなく、各地域で歌詞は自由にアレンジされるが、独自の拍子の取り方“ソーランソーラン”のかけ声だけは変わらないと言われている。[(2)]（表1）

4.　演舞構成

演舞構成要素として、構成人数、テーマ、動き（身体的特徴・隊形変化・役目等）、総合美術（衣装・道具（大道具・小道具）、音楽を取り上げた。

5.　鳴子

鳴子のルーツは田畑の雀脅しであった。鳴子踊りの音楽を作曲した武政英策が、フラメンコがカスタネットなら、よさこい祭りは「鳴子」と考案したものである。素朴な民俗楽器で、伝統の鳴子は朱色をベースに、3本の拍子木（可動する小さな部分）がついている。踊り子は、踊る時以外にも、感動した時、喜びを表現する時、挨拶をする時に鳴子を鳴らし、踊り子同士や観客との一体化を強めるものとしても使われている。

表1　ソーラン節の歌詞

●積丹町に伝わるソーラン節
エイ　ヤーレン　ソーラン
ソーラン　ソーラン　ソーラン
ハイ　ハイ
鰊きたかと　鴎にとえば
わたしゃたつ鳥　波にきけ
チョイ
ヤサ　エーエンヤーサーノ
ドッコイショ
ハア　ドッコイショ　ドッコイショ

大島　小島は　東西島よ
なぜにゴメ島　はなれ鳥

ゴメが島でも　時節がこいば
かもめスイスイ　群れとまる

凪の小泊　厚苫暮れりゃ
招く美国の灯が紅い

めぐるゴメ島　大島小島
疲れや帆まかせ　風まかせ
（以下省略）

●余市町に伝わる
「沖揚の唄（ソーラン節）」
イヤーレン
ソーラン　ソーラン　ソーラン
ソーラン　ソーラン　ハイ　ハイ
沖の鴎が物言うなれば
便り聞いたり聞かせたりチョイ
ヤサ　エーンヤーサーノ
ドッコイショ
アードッコイショ　ドッコイショ

湯内よいとこ　一度はござれ
浜に黄金の花が咲く

沖のローソク岩どんとうつ波は
可愛船頭衆の度胸ためし

ここは湯内身は島泊
灯いらずのローソク岩

浜のあねごは白粉いらぬ
銀のうろこで肌光る
（以下省略）

出典：YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会（1997）『YOSAKOI ソーラン祭り 1997 スペシャルガイドブック』ルック

6.　鳴子踊り

武政英策が、郷土民謡のよさこい節を編曲した音楽を「よさこい鳴子踊り」という。その際、鳴子をもって踊る踊りを考案し、高知のよさこい祭りでは、鳴子をもって踊る踊りを「よさこい鳴子踊り」と言う。現在、高知を手本に始められた祭りでは、手に鳴子を持った踊りを採用している。以上のことにより本研究では、高知よさこい祭りを手本に、鳴子を手に持って踊る踊りを「鳴子踊り」と呼ぶことにする。

7.　鳴子踊りを内包する祭り

本研究では、高知のよさこい祭りと北海道のYOSAKOIソーラン祭りに影響を受け、かつ「鳴子踊り」を参加ルールとしている祭りを「鳴子踊りを内包する祭り」と呼ぶ。

Ⅲ．YOSAKOIソーラン祭りの歴史と変遷

1．YOSAKOIソーラン祭りの概観

(1) 祭りの由来

1992年、長谷川岳を中心とする学生達は、北海道独自の祭りを作るため、長谷川が刺激を受けた高知のよさこい祭りの参加ルールに着眼し、高知が高知民謡よさこい節であるなら、北海道は北海道民謡ソーラン節を使用しようと考えた。高知「よさこい」と北海道「ソーラン」を合体させ、「よさこい」を「YOSAKOI」とすることで独自性を持たせると共に、本場高知のよさこい祭りに敬意を表すために、よさこいをソーランの前におき、“YOSAKOIソーラン祭り”の名称を誕生させた。又、高知よさこい祭りの演舞形態である、衣装（見るもの、着るもの）、踊り（酔うもの、踊るもの）、音楽（聞くもの、揺らすもの）、地方車（束ね、導くもの）[3]を手本に、北海道YOSAKOIソーラン祭りの演舞形態が決定された。

(2) 祭りの歴史的背景

①高知よさこい祭りの影響

1991年、長谷川は、よさこい祭りで同年代の若者が生き生きと踊っている姿に鳥肌が立つほど刺激を受けた状況は、以下のようである。「長谷川岳は、流れる汗も拭うことも忘れたまま、焼けた路上に立ちすくんでいた。（中略）『この圧倒的なパワー、エネルギッシュな若者達・・・』それは、全身にざわっと鳥肌の立つ、恐怖にも似た驚きと感動だった。」[4]この感動が長谷川を動かすきっかけとなる。 同年12月、長谷川の思いに賛同した学生達でYOSAKOIソーラ

ン祭り実行委員会を発足させ、1992年何度も友人と話し合いを重ね、学生達の手で祭りの準備が進められた。

②YOSAKOIソーラン祭りの準備期間

YOSAKOIソーラン祭りを立上げるためには、膨大な資金、道路使用に伴う警察の許可、市役所や道庁の協力、人員の手配、進行管理、祭りの宣伝、踊り子集めなどの多くの課題を克服しなければならなかった。長谷川は、企画実現のため高知県に友人と向かい、高知県庁庁舎の前で、橋本知事に企画書を手渡し、「今の若者は無気力である、ひ弱な花であるといわれるが決してそうではないのです。若者はエネルギーを持っている。エネルギーは衰えていない。ただ、エネルギーを表現する場がないだけなのです。われわれは、よさこいソーラン祭りでエネルギーが衰えていないことを証明したい」(5)と企画書の中で若者のエネルギーを主張した。この内容からも、YOSAKOIソーラン祭りは、若者が「発散する場」・「表現する場」を求めていることが読み取れる。学生達は、長い時間をかけて山積にされた課題を乗り越え、橋本知事や横路知事その他多くの大人の賛同を得て、1992年6月13～14日“誰もが主役”“街は舞台だ日本は、変わる”をコンセプトに北海道札幌市で第1回YOSAKOIソーラン祭りを開催した。

③参加者数の変動

第1回YOSAKOIソーラン祭りには、高知県のセントラルグループを筆頭に北海道9チームの計10チーム、約1000人が参加した。第4回から祭り自体の演出・運営面が大きく工夫され、第5回には1万人を超える108チームを記録し、今年第18回目には、316チーム（3万3000人）が参加し、観客は178万7000人を動員している。近年、支部大会もさかんに行なわれるようになり、YOSAKOIソーラン祭りの踊りは、北海道の各市町村で多くの人に刺激を与え、北海道の至る所でYOSAKOIソーラン踊りが見られるようになっている。又、マスメディアなどの影響により第18回は、北海道外の都府県から40地域が参加している。現在、同世代のチーム・各世代ミックスしたチーム・子供のチームなど、0歳～92歳の男女が祭りに参加し、色々な選択項を広げている。又、若者達が、中心になり様々な世代や参加者を盛り上げ、祭りを引っ張っている。このように、学生達が興した祭りが現在急成長し、若者の力が見直され、若者の参加者の自由な発想が祭りに活かされ、ますます参加者が増加している。YOSAKOIソーラン祭りは、近年例のない急成長を遂げ、多くの人々を動員する祭りとして、さらにマスメディアなどで取り上げられるようになった。（表2）

(3) 鳴子踊りを内包する祭り

近年、YOSAKOIソーラン祭りの演舞が、洞爺湖サミットの招待演舞や紅白歌合戦招待など高く評価され、教育現場や町おこし・村おこし・地域改革を望む市町村に大きな影響を与えている。YOSAKOIソーラン祭りの影響を受けた市町村では、鳴子を持つ踊り子を編成して競い合い、曲は高知県でよさこい節、北海道でソーラン節を取り入れたように、地元の曲などを取り入れ地域性を強調するなど、祭り自体に工夫を凝らしている。市民参加型のYOSAKOIソーラン祭

表2　YOSAKOIソーラン祭り　開催規模の推移

回	参加チーム	参加者（百人）	観客動員数（万人）	道内参加地域数	道外参加地域数	会場数
第1回（1992年）	10	10	20	4	2	3
第2回（1993年）	26	25	44	5	2	6
第3回（1994年）	25	30	58	9	2	6
第4回（1995年）	48	48	76	17	4	7
第5回（1996年）	108	100	107	55	5	12
第6回（1997年）	183	190	138	107	11	16
第7回（1998年）	280	290	180	137	11	22
第8回（1999年）	333	340	193.5	168	18	30
第9回（2000年）	375	380	182.5	174	24	30
第10回（2001年）	408	410	201.3	187	32	33
第11回（2002年）	344	440	151	190	32	27
第12回（2003年）	330	440	202	190	36	25
第13回（2004年）	333	430	208	190	40	25
第14回（2005年）	334	430	214.1	190	40	27
第15回（2006年）	350	450	186.4	160	40	31
第16回（2007年）	341	430	216.5	160	40	30
第17回（2008年）	330	330	202.4	160	40	28
第18回（2009年）	316	330	178.7	160	40	25

※第15回の参加市町村数減少理由（道内の市町村合併のため）
※第11回～第16回の参加者数には「ソーランイリュージョン」への参加者（約1万人）が含ま
出典：YOSAKOIソーラン祭り組織委員会

りやよさこい祭りに着眼した市町村では、次世代を担う子供たちに“故郷意識”を育んでもらえるような地域作り、市民コニュニケーションの提供、観光や商工業の活性化に結びつけていくことを目的に、市民の地域活性を願い祭りが開催されている。以上のことより、鳴子踊りは、新しい地域文化創造、地域活性化を求める土地に影響を及ぼしていることが明らかになった。鳴子踊りは、ただ踊るのではなく、身体表現を通して自己を表現し、感動する場や人々の交流の場を提供し、多くの人と人を結ぶ踊りになっている。（表3）

2.　YOSAKOIソーラン踊りの演舞概要

(1) 演舞規定

YOSAKOIソーラン祭りの踊りの2大原則は、1. 鳴子を持って踊ること　2. 曲にソーラン節のフレーズを入れることである。その他、基本的な参加人数は1チーム40名以上150名以内（40名未満だと審査は受けることができない）・演舞時間は4分30秒（厳守）・踊りはパターンとしてパレード形式（地方車を先頭に前進する踊り）・ステージ形式（進まず固定する踊り）・静止型パレード形式（パレード型で進まず固定する踊り）を振付・地方車は歩道を走るので車両の大きさ・乗員人数・音量などの制限を法律の枠内、となっている。これらは、参加チームの増加に伴い、円滑な運営を促すためにルールが定められている。

(2) 演舞内容〈4大要素〉

①衣装〈観るもの、着るもの〉

毎年、チームのコンセプトやテーマに基づき、チームのカラーやスタイルを守りながら衣装が創作されている。初期のよさこい祭りでは、正調の美すなわち、女性は菅笠をかぶり、浴衣に腰巻き姿、男性はまめしぼりを頭に巻き、浴衣にステテコ姿と盆踊り風が主流であった。そして、徐々に踊りがダイナミックに変化したことにともなって、動きやすい法被が主流となり、法被のデザインにも凝るようになる。法被は、漁師が海から上がったとき、浜で焚火にあたりながら暖をとる浜着に似ていることから[(6)]ソーラン節を特徴づける衣装にもなっている。その他には、着物をアレンジした衣装や江戸前の腹かけスタイル等の和風な衣装や、HIP HOP STYLEや中国風など、民族衣装などバラエティー豊かな衣装が見られる。又、装飾品も、かんざし・付け

表3　全国に広がる鳴子踊りを内包する祭り（2000年以前に開催された祭りを抜粋）

都道府県	市	祭り名	開催年
北海道	札幌市	YOSAKOIソーラン祭り	1992～
	江別市	えべつ北海鳴子まつり	1995～
	千歳市	YOSAKOIソーランちとせトーナメント	1999～
青森県	弘前市	よさこい津軽	2000～
岩手県	盛岡市	YOSAKOIさんさ	1998～
秋田県	秋田市	ヤートセ秋田祭	1998～
山形県	村上市	村山徳内祭り	1995～
宮城県	仙台市	みちのくYOSAKOI祭り	1998～
新潟県	柏崎市	どんGAL！祭り	1999～
長野県	安曇野市	信州安曇野わさび祭り「YOSAKOI安曇野」	2000～
群馬県	前橋市	だんべえフェスタ　火の皇・光の皇	1992～
埼玉県	朝霞市	～朝霞市民まつり「彩夏祭」関八州よさこいフェスタ～	1983～
東京都	新宿区	東京よさこい祭り（大高田馬場祭り）	1997～
	豊島区	ふくろ祭り東京よさこい	2000～
神奈川県	小田原市	ODAWARAエッサホイ踊り	1999～
	座間市	ZAMA・燦夏祭	1998～
	横浜市	ヨコハマカーニバル（ハマこい踊り）	1998～
	相模原市	相模原よさこいRANBU！	1999～
千葉県	松戸市	新松戸祭り	1996～
茨城県	東茨城郡	小鶴商店街よさこい祭り	1997～
静岡県	沼津市	ぬまづダンスフェスタ　よさこい沼津	1997～
	沼津市	よさこい東海道	1996～
石川県	七尾市	能登YOSAKOIかいかい祭	1997～
福井県	福井市	フェニックスまつりYOSAKOIイッチョライ	1998～
岐阜県	瑞浪市	瑞浪美浪源氏七夕祭り	1998～
愛知県	名古屋市	にっぽんど真ん中祭り	1999～
三重県	津市	津まつり安濃津よさこい	1998～
滋賀県	甲賀郡甲賀町	ござれ・GO-SYU	1999～
京都府	京都市	京都まつり	1996～
大阪府	貝塚市	yosakoiソーリャ！	1998～
	箕面市	箕面まつり	1998～
兵庫県	加古川市	KAKOGAWA 踊っこまつり	1999～
奈良県	奈良市	バサラ祭り	1999～
鳥取県	米子市	米子がいな祭り	1997～
広島県	呉市	よっしゃこい祭	1998～
山口県	下関市	川棚温泉まつり舞龍祭	2000～
長崎県	佐世保市	YOSAKOIさせぼ祭り	1997～
福岡県	福岡市	ふくこいアジア祭り	2000～
高知県	高知市	よさこい鳴子祭り	1954～
香川県	観音寺市	銭形まつり踊りコンテスト	1996～
熊本県	荒尾市	あらお荒炎祭	1997～
	荒尾市	さのよいファイヤーカーニバル	1998～
大分県	別府市	夢・泉・郷 BEPPUドリームバル	1997～

出典：よさこい関係雑誌・パンフレット等から抽出

毛・ハチマキ・お面・バンダナ・帽子・サングラス・笠など衣装に合わせて多様化している。メイクは、目もとに赤、鼻には白いラインを入れるのが主流である。踊り子の中には、ドーランやペインティング、黒塗りをするなどメイクで目立とうとしている人も数多い。高知のシンプルなメイクに対して北海道のメイクには比較的大胆な傾向が見られる。衣装やメイクは、チームの特徴を印象づけ、踊りを有効的に見せるための手段として工夫され、又、変身願望を叶えてくれる重要なアイテムとして、様々な創意工夫がされている。

②踊り〈酔うもの、踊るもの〉

動作的特徴としては、足のスタンスは広く、低い重心を保ち、前のめりの上体や垂直な姿勢など様々である。作品に取り入れられるダンスの種類は、ソーラン節の本来の姿であるニシン漁の綱引きや櫓漕ぎの動きを再現した動きやジャズダンス・エアロビクス・モダンダンス・歌舞伎・日本舞踊・ヒップホップなどチームの好みに合わせたものになっている。踊りには、労働歌を感じさせる力強さ・重々しさ・迫力があり、全身でリズムを刻み込む踊りが、主流である。又、鳴子に関しては、本場高知では、鳴子の音色を考慮した動きをするのに対し、北海道では、持って踊るだけのチームもある。作品展開は、創作ダンス的展開・ショーダンス的展開・応援団的展開と大きく3つに分けられている。演舞形態は、パレード形式とステージ形式があるので、両方の空間構成を配慮した創作が行なわれている。隊形は、集団美・個性美が光るように、密集や点在・列などを取り入れ、飽きがこない華やかな演出ができるよう各チーム工夫を凝らしている。又、初心者チームのほとんどは、有名なチームの作品を参考に創作を行っているが、踊りのレベルは年々高度になり競技性が高くなってきている。山口昌男は、YOSAKOIソーラン祭りの演技を以下のようにコメントしている。「たけのこ族の再来かと一瞬たじろいだ。赤・緑・黄色・・・・・・。（中略）ソーラン節のアレンジの曲に乗せて律義に繰り返す。（中略）学校の体育祭の印象だ。」[7] 山口の言葉通り、洗練された踊りは集団美を保ちながら、学校のマスゲームや軍隊の様なイメージを抱かせる踊りである。現在、参加者達は、集団演技の中で、どのように自己主張していくか、工夫を凝らしている。

③音楽〈聴くもの、揺らすもの〉

音楽は、どこかにソーラン節が入っていれば、曲調も演奏形態も自由なので、各チーム、テーマに基づき、毎年、自分達のオリジナルの曲を制作している。踊り子達は、曲や踊りに合わせ“ソーランソーラン”など、かけ声をかけながら全体のバランスをとり、又、チーム独自のかけ声を加え、チーム仲間意識を高めている。音楽の種類は、ダンス音楽・ヒップホップ・激しいロック・サンバ・ラップ・ジャズなどをベースに、和太鼓、ドラ、拍子木、トランペット、などをかぶせている。プロの民謡歌手の唄声や生音を入れるチームも増え、工夫を凝らしている。全体的に和風の質感を活かしながら洋楽とミックスした完成度の高い音楽が増えている。

④地方車〈束ね、導くもの〉

チームのシンボルとして先導役・司令塔をつとめる車（改造したトラック）を地方車と呼び、パレード形式の演舞で登場する。「地方」とは、舞踊で音を受け持つ人たちを称する用語である。[8] 地方車には、踊り子を先誘導する人が乗り、音響機材や照明機材がセットされ、生バンドやボーカルがいるチームには、お立ち台がある。又、地方車はチームのシンボルになるので、チーム名を際立たせるなど、デザインにも工夫を凝らしている。

(3) 競演場の特徴

YOSAKOIソーラン祭りの競演場は、参加チームの増加に伴い、第1回3会場から第18回には、25会場と増加している。競演場の規模は、札幌市大通り駅を中心に、大型スーパーホームセンター駐車場・観光スポット・商店街や道路などを競演場にし、規定人数40～150人に対応できる広い敷地を確保している。競演場の多さは、同祭りの特徴でもある。

(4) 観客と演者の位置関係

観客と演者の位置関係においては、“見る－見られ

る”という関係が成立している。観客と演者の位置関係に注目してみると、主に以下の5つに分類される。道路の両側に観客が位置し、その間を演者が直進する形式（A）、道路の桟敷席に観客が位置し、その間を演者が直進する形式（B）、舞台に演者が位置し、360度観客が位置する形式（C）、舞台に演者が位置し、270度観客が位置する形式（D）舞台に演者が位置し、180度観客が位置する形式（E）である。観客との距離関係は、パレード静止型の会場（主に商店街の道路を使用）では、観客と演者の位置は、かなり接近している。（図1）

（5）観客と演者の視線関係

観客と演者の視線の方向性は、観客が演者と並列な形式、観客が演者を見下ろす形式、観客が舞台場の演者を見上げる形式と主に3つに分類される。以上のように、観客の視線はあらゆる方向から演者に向かっているので、振付・演出に関しては、360度意識した創作を行ない、又、観客との距離関係も様々なので、大きな動きを取り入れるなど、観客との距離を近づけるために様々な創意工夫がされている。（図2）

Ⅳ．結果及び考察

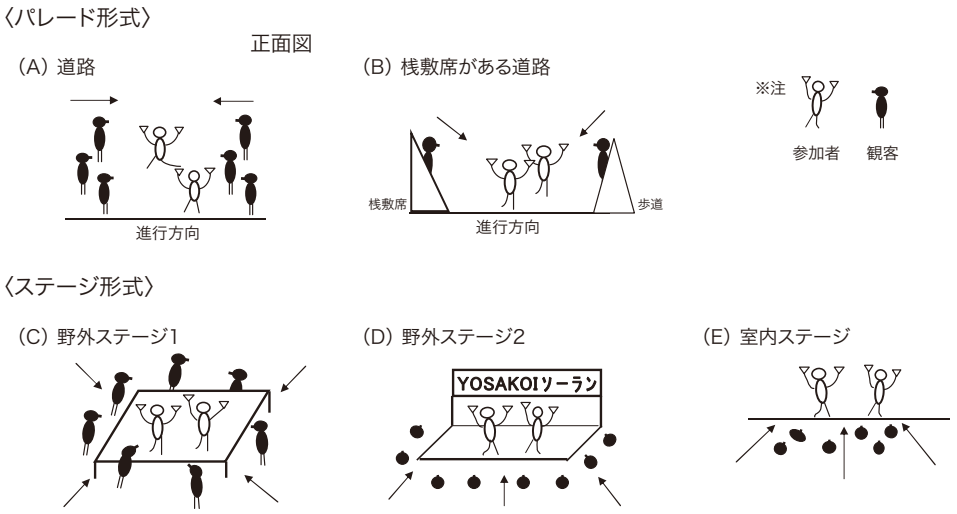
1．　1999年・2009年YOSAKOIソーラン祭り審査内容

（1）1999年審査内容

1999年審査項目は、「踊り」40点、「音楽」30点、「衣装」30点の100点満点であった。「踊り」は、アンサンブル（＝調和）、エネルギー等を含み、パレードでは、まんべんなく100mを踊っているか・どこの箇所を見ても楽しめる踊りになっているかであった。「音楽」は、曲・唄い手・効果音の使い方が評価のポイントであった。「衣装」は、衣装やメイク等を含める美術点として設定されていた。

（2）2009年審査内容

審査項目は、「演舞」50点、「エネルギー・感動」



内田忠賢　「都市と祭り：高知『よさこい祭り』へのアプローチ（1）」　1992参考　筆者作成

図1　参加者と観客の位置関係

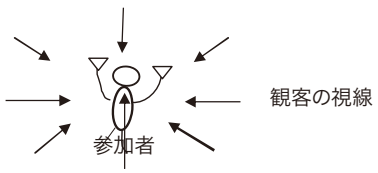


図2　参加者と観客の視線関係

40点、「総合美術」10点の100点満点であった。「演舞」は、チームの独自性・特色を上手に表現し、踊り全体の構成の中に印象に残るものがあるかが焦点となっていた。「エネルギー・感動」は、踊り子から熱意や楽しさが伝わり、感動を与え、演舞からみなぎる活力や勢いに心を動かすものがあることと参加者自身に焦点をあてていた。「総合美術」は、衣装・旗・小道具などのデザインや色調が演舞と調和の取れたものであり、独自性を持っていること、演舞に活かされ相乗効果をもたらしていることとなっていた。又、2009年は、「大通公園という舞台でチームが独自性を表現し、印象に残る演舞を行なっているか、エネルギーや感動といった「伝える力」を踊り子が、チームが持っているかを評価していきます。」[(9)]と、審査項目以外に審査方針が打ち出された。この方針は、YOSAKOIソーラン祭りがどうあるべきかを具体的に示唆した内容となっていた。

(3) 1999年・2009年　審査項目の比較

1999年の審査項目が、「踊り」「音楽」「衣装」だったのに対し、2009年は「演舞」「エネルギー・感動」「総合美術」となった。「音楽」の配点がなくなり、「衣装」も総合美術の一部に含まれ、踊り子が持つ「エネルギー・感動」は単独の項目になっていた。2009年は、審査内容の中で「独自性・伝える力・みなぎる活力や勢い・感動」という言葉が、浮かび上がり、踊り子そのものに焦点をあてた配点が高くなっていた。

2.　1999年・2009年上位入賞チームの演舞構成

(1) 1999年上位入賞 3チームの特徴

構成人数は、Aチーム190名、Bチーム120名、Cチーム80名と大人数で構成されていた。2チームは、54歳・43歳と平均年齢が高かった。(表4)

①テーマ

テーマは、3チームとも北海道の海や人々をテーマに取り上げていた。

②動きについて

身体的特徴は、全身は、3チームともダイナミックで、低重心前のめりの動きが多かった。上肢運動は、大振りで上下の動きや手を横に固定する動きが多かった。下肢運動は、足のスタンスが広く、両足屈曲や屈伸、片足重心が多く見られた。動作/ポーズの優劣は、動作優勢で、優位な身体部位は、体幹・上肢・下肢で、全身運動が展開されていた。

振付特徴は、櫓漕ぎ・綱引きの動きや同じ動きで

表4　1999年YOSAKOIソーラン祭り　上位受賞　3チーム　演舞構成の特徴

チーム		A 大賞(平岸天神)札幌市	B 準大賞(三石なるこ会)三石市	C 3位(阿亀仟神)苫小牧市
構成人数		190名(平均年齢27歳)	120名(平均年齢54歳)	80名(平均年齢43歳)
テーマ		豊漁に感謝する、沸きあがる喜び。北海道生まれの文化の創造。	明るい浜の女、大漁に感謝する月夜の祈り、大漁の浜の賑わいの喜びを表現。浜の女性のパワー集結。	太平洋の荒波と風。海を表現。和風にこだわる。
身体的特徴	全身	ダイナミック 低重心前のめり	ダイナミック 低重心前のめり	ダイナミック 低重心前のめり
	上肢運動	大振り、斜め、上、横固定、上方振動、上下、左右	大振り、上下、廻旋、上横、横固定	大振り、上下、斜め、前方、左右
	下肢運動	足のスタンスが広い、片足重心、両足屈曲・屈伸、片足前蹴りジャンプ、躍動的運動	足のスタンスは広い、両足屈曲・屈伸、片足重心、片足ジャンプ、踏み込み	足のスタンスが広い、片足重心、両足屈曲・屈伸、片足ジャンプ、躍動的運動
動作/ポーズの優劣		動作優勢	動作優勢	動作優勢
優位な身体部位		体幹・上肢・下肢	体幹・上肢・下肢	体幹・上肢・下肢
振付特徴		櫓漕ぎ、回転、構成組み移動、多彩な動きのシンクロ（ナンバ、漁師の所作、盆踊り風、歌舞伎風）	櫓漕ぎ、左右クロス、動きの高低（ナンバ、漁師の所作、エアロビ風）	動きの高低、方向変え（ナンバ、日本舞踊、和風）
雰囲気		土着的、漁師の歓喜、力強い	土着的、浜の女、力強い	土着的、荒波などの自然界、力強い
隊形変化		整列、ズレ列、密集、円 変化:13回	整列、整列クロス、密集、第三角形 変化:5回	整列、ズレ列 変化:7回
役目		3パート(男・女・旗)	1パート	1パート
衣装		2種類:衣装展開有り 鉢巻(紺:チーム名)、長半纏(カラフル)と長半纏(紫)、腹掛け(紺)、赤インナー、股引き(黒)、金手甲、白足袋	1種類:衣装展開有り 鉢巻(茶色)、長半纏(大漁旗のカラフルと紺でチーム名のリバーシブル)、腹掛け(茶色)、黒ズボン、黒手甲、白足袋	1種類:衣装展開なし 鉢巻(白)、長半纏(黒:チーム名と波)、腹掛け(黒)、股引き(黒)、黒手甲、黒足袋
道具		大道具:中4(組み合わせてチーム名になる)、小道具:フラッグ15	大道具:大漁旗オブジェ1(小旗14枚)・大旗1、小道具:なし	大道具:なし 小道具:小旗2(チーム名)
全体の配色		カラフル、紫	カラフル(大漁旗)、紺	黒、青(波)
音楽		唄1'49" メロディー2'25" 生演奏:太鼓、ボーカル	唄3'40" メロディー0'33" 生演奏:太鼓、ボーカル	唄0'45" メロディー3'22" 生演奏:なし

筆者作成

高低を出す工夫がされ、力強い動きが多かった。舞踊の種類は、ナンバや漁師の所作などの民族的特性が見られ、盆踊り・歌舞伎・日本舞踊の動きやエアロビクスなどを取り入れていた。演舞の雰囲気は、3チームとも土着性を感じる力強い演舞であった。

隊形変化は、Aチーム13回、Bチーム5回、Cチーム7回、役目は、Aチーム3パート、Bチーム1パート、Cチーム1パートであり、整列・ズレ列や密集が多かった。中間のシーンでは、大三角形や密集を用いているのが特徴的であった。

③総合美術について

衣装は、Aチーム2種類、B・Cチームは1種類であった。衣装展開は、A・Bチームが行なっていた。3チームとも、鉢巻・長半纏・腹掛け・股引き・手甲・足袋と正調ソーランの衣装をベースに、チーム名を入れる等、テーマに合わせて色彩など工夫を凝らしていた。この時期は、全員同じ衣装か同じ衣装で色を変えるだけが主流であった。道具は、Aチーム：中旗1（チーム名）・フラッグ15、Bチーム：大漁旗のオブジェ1・大漁旗12、Cチーム：小旗2（チーム名）であった。この時期は、旗が多く用いられ、旗にチーム名を入れていた。

作品全体の配色は、A・Bチームはカラフル、Cチームは黒紺でシックであった。

④音楽

音楽の唄の長さは、Aチーム1’49”、Bチーム3’40”、Cチーム0’45”あった。A・Bチームは、生演奏（ボーカルと太鼓）も作品に取り入れていた。Cチームは、かけ声の時間が長かった。

(2) 2009年上位入賞 3チームの特徴

構成人数は、Aチーム130名、Bチーム150名、Cチーム150名と大人数で構成された、100人を越える札幌市の有力チームである。（表5）

表5　2009年YOSAKOIソーラン祭り　上位受賞　3チーム　演舞構成の特徴

チーム		A 大賞（平岸天神）	B 準大賞（新琴似天舞龍神）	C 準大賞（VOGUE038）
構成人数		130（男30女100）	150（男30女120）	150（男40女120）
テーマ		『平岸天神神楽』 大漁を祈願し奉納の舞、里神楽をアレンジ、4S（speed、sharp、strong、smile）を展開	2009開拓魂『大輪の華』～風雅～「究極の和」一体感のある演舞、力強い音、ストーリーのある動き	『NEO JAPANESQUE ～ 瑞 希 ～』凛々しくきらびやかに舞う、静と動のコントラストの美しさ、和製オーケストラ
身体的特徴	全身	ダイナミック、前重心、上下斜め	ダイナミック、垂直な立ち姿勢	ダイナミックとスタティック、垂直な上下、オフバランス
	上肢運動	大振り、斜め、曲げ伸ばし、曲線的な左右上下の振動、上下、横固定	大振り、片手伸ばし、片手横伸ばし、上下、両手斜め、横固定	大振り、直線的で曲線的な振動、上前横、直角、曲げ伸ばし
	下肢運動	足のスタンスが広い、片足重心、両足屈曲・屈伸、全員一時的な両足屈曲、片足ジャンプ、ターン、両足曲げ座り、躍動的運動	足のスタンスは狭い、歩行、小走り、両足ジャンプ、片足重心、スキップ、一時的な両足屈曲、ターン	足のスタンスが広い、片足重心、片足前後横ジャンプ、片足膝立て座り、ターン、両足ジャンプ、躍動的運動、両足屈曲・屈伸
動作/ポーズの優劣		動作優勢	ポーズ優勢	動作優勢
優位な身体部位		体幹・上肢・下肢	上肢・下肢	体幹・上肢・下肢
振付特徴		カノン、うねり、ポーズ、多様な動きのシンクロ、構成を組み移動、後ろ向き（ナンバ、里神楽、HIP HOP）	歩行、構成を組み移動、多様な動きのシンクロ （ナンバ、手踊り、日本舞踊）	連続的なジャンプ、リフト、多様な動きのシンクロ （ナンバ、手踊り、JAZZ・HIP HOP）
雰囲気		土着的、漁師的	古典的、女性的（芸者風）	西洋的、独創的
隊形変化		円・ズレ列・密集・点在・斜め・整列 変化：19回	整列（正方形・長方形）、三角形、斜め整列　変化：21回	三角形、ズレ列、点在、台形 変化：12回
役目		3パート：男、女、女旗	9パート：男大人（笠・傘）、男子ども、女花魁（扇子）、女大人（笠）、女子ども（鉢巻）	10パート：男、男鼓、男扇子、男傘、女、女扇子、女傘、女纏、男女フラッグ、男女リフト
衣装		3種類：衣装展開有り 全員：鉢巻（紺・チーム名）、白足袋 ①男：袴アレンジ（カラフル・チームロゴ）・白股引き・黒手甲、②女：長半纏（カラフル）・黒腹掛けに柄入り・黒股引き・黒手甲、③女：袖なし法被（チームロゴ）・白股引き、金手甲	4種類：衣装展開有り 全員：白足袋、①男：着物アレンジ（白ベース・チーム名）、腹掛け（黒ベース赤ライン）、黒ズボン、黒手甲、②女：着物アレンジ（黒ベース）、③女着物アレンジ（赤ベース・笠）、④女：着物アレンジ（チーム名・赤白ベース）・鉢巻（チーム名）	2種類：衣装展開有り 全員：白足袋 ①男：鉢巻（白）・貴族風衣装をアレンジ（赤ベース・チームロゴ）・黒ズボン、カラフル手甲、②女：着物アレンジ（赤・白ベース・チームロゴ）
道具		大道具：大のぼり1（チームロゴ）、大旗2（チーム名） 小道具：旗12	大道具：大のぼり1（チームロゴ） 中のぼり黒2（チームロゴ）、中のぼり白2（チーム名半）、小のぼり2（チーム名半）、中幕2（チームロゴ） 小道具：扇子12、傘17	大道具：中大幕2（チームロゴ）、中大幕2、中のぼり2、小道具：扇子（白3、赤金16）、傘（白9．赤7．大4）フラッグ6、纏4
全体の配色		カラフル	赤・白・黒・紫	赤・白・金・オレンジ・緑
音楽		唄1’46” メロディー2’34” 生演奏：太鼓、ボーカル	唄2’18” メロディー2’07” 生演奏：三味線、太鼓、ボーカル	唄1’20” メロディー2’43” 生演奏：三味線、太鼓、鼓、ボーカル

筆者作成

①テーマ

テーマは、Aチームは里神楽をアレンジした作品、Bチームは究極の和を追及した作品、Cチームは新しい日本文化を創造した作品と、作風は様々で各チームの個性や独創性を打ち出すものであった。

②動きについて

身体的特徴は、全身は、3チームともダイナミックさが際立ち、Cチームはスタティックさも兼ね備えていた。又、Aチームは前重心や体幹を上下斜めにする動き、Bチームは垂直な立ち姿勢、Cチームは垂直な上下やオフバランスが特徴的であった。

上肢運動は、3チームとも大振りであった。又、Aチームは、斜め・曲げ伸ばし・曲線的な左右上下の振動・上下・横固定が多かった。Bチームは、片手伸ばし・片手横伸ばしという片手の運動や上下・両手斜め・横固定の運動が多く見られた。Cチームは、直線的で曲線的な振動・上前横・直角・曲げ伸ばしの動きが多かった。

下肢運動は、役目によって異なるが、全体的には、片足重心・両足屈曲や屈伸が多かった。又、Aチームは、足のスタンスが広い・全員一時的な両足屈曲・片足ジャンプと躍動的運動が特徴的であった。Bチームは、足のスタンスは狭く歩行や小走り、両足ジャンプ・スキップ・ターンが多かった。Cチームは、足のスタンスは広く・片足前後横ジャンプ・両足ジャンプと躍動的な運動やターンが多く、スタティックさを表現する場面では、片足膝立て座りなどが用いられていた。動作／ポーズの優劣は、3チームとも動作優勢で、優位な身体部位は、Aチームは体幹・上肢・下肢、Bチームは上肢・下肢、Cチームは体幹・上肢・下肢であった。

振付特徴は、3チームとも同時に多様な動きをシンクロさせる手法を用いていた。又、A・Bチームは、構成を組み進行する振付を用いながら、次の構成へ入る手法を用いていた。又、Aチームはカノン・うねり・ポーズ、Bチームは歩行で上肢の運動で見せる振り、Cチームは連続的なジャンプ・高いリフトが特徴的であった。舞踊の種類は、3チームとも、ナンバの所作など民族的特性が見られた。又、Aチームは里神楽の所作やHIP HOPの足取り、Bチームは手踊りや日本舞踊の動き、Cチームは手踊りやJAZZ・HIPHOPのステップなど現代的な動きも取り入れていた。演舞の雰囲気は、3チーム異なるものであり、Aチームは土着性のある力強い演舞、Bチームは究極の和を求める洗練された古典的な演舞、Cチームは凛々しく躍動感溢れる独創的かつ煌びやかな雰囲気となっていた。

隊形変化は、Aチーム19回、Bチーム21回、Cチーム12回と、A・Bチームは変化回数がCチームに比べ多かった。又、3チームとも、同時に様々な体形変化が展開されていた。Aチームは円・ズレ列・密集、Bチームは整列（正方形・長方形）・三角形・斜め整列、Cチームは三角形・ズレ列・台形が特徴的であった。

役目は、Aチーム3パート、Bチーム9パート、Cチーム10パートであった。B・Cチームは、役目が9・10パートとAチームに比べて多かった。

③総合美術について

衣装は、Aチーム3種類、Bチーム4種類、Cチーム2種類であった。Aチームは、男性は袴をアレンジした衣装（カラフル、チームロゴ）、女性は長半纏（カラフル）と袖なし法被（チームロゴ）の衣装で、全員チーム名入りの紺の鉢巻を巻き、股引、手甲を身につけていた。Bチームは、男性は着物をアレンジした衣装（白ベース、チーム名）に腹掛け（黒ベース赤ライン）・黒ズボン・黒手甲、女性は着物をアレンジした衣装（黒ベース）と（赤ベース、笠）と（赤白ベース、チーム名）で、赤白ベースの衣装の人はチーム名入りの白鉢巻を巻いていた。Cチームは、男性は鉢巻（白）・貴族風衣装をアレンジした衣装（赤ベース、チームロゴ）・黒ズボン・カラフル手甲、女性は着物をアレンジした衣装（赤白ベース、チームロゴ）であった。3チームとも、白足袋であった。又、衣装にチーム名もしくはチームロゴが必ず入っており、中には、2箇所に入っている人達がいた。

道具は、Aチームは大のぼり1（チームロゴ）・大旗2（チーム名）・旗12、Bチームは大のぼり1（チー

ムロゴ）・中のぼり黒2（チームロゴ）・中のぼり白2（チーム名半分）・小のぼり2（チーム名半分）・中幕2（チームロゴ）・扇子12・傘17、Cチームは中大幕2（チームロゴ）・中大幕2・中のぼり2・扇子（白3・赤金16）・傘（白9・赤7・大4）・フラッグ6・纏4であった。3チームとも、のぼり・大旗・幕のような大道具や扇子・傘などの小道具が数多く用いられ、各道具にチーム名かチームロゴが入れられていた。

作品全体の配色は、Aチームカラフル、Bチーム赤・白・黒・紫、Cチームは赤・白・金・オレンジ・緑で色彩を艶やかに彩っていた。

④音楽

音楽の唄の長さは、Aチーム1'46"、Bチーム2'18"、Cチーム1'20"であった。3チームとも、生演奏（ボーカルと太鼓）を作品に取り入れ、毎年テーマに合わせ歌詞を変えていた。

（3）1999年・2009年上位入賞 3チームの比較

構成人数は、1999年・2009年とも大人数80～190人で構成されていた。1999年は札幌市・三石市・苫小牧市、2009年は札幌市の3チームが上位入賞であった。

①テーマ

テーマは、1999年は3チームとも、北海道の海や海にかかわる人々をテーマにしていたが、2009年は里神楽をアレンジした作品、究極の和を追及した作品、新しい日本文化を創造する作品と、3チームともテーマは異なっていた。

②動きについて

身体的特徴の全身は、1999年はダイナミックで低重心前のめりの動きが多かったが、2009年はダイナミックさやスタティックさを取り入れるチーム、前重心・立ち姿勢・垂直での上下やオフバランスなど、様々であった。

上肢運動は、1999年は大振りで上下の動きや手を横に固定する動きが多かったが、2009年は大振りで、斜め・曲げ伸ばし・片手伸ばし・片手横伸ばし・直線的で曲線的な振動・上前横・直角など、バリエーションが増していた。

下肢運動は、1999年は足のスタンスが広く、両足屈曲や屈伸・片足重心が多く見られたが、2009年は足のスタンスが広い・狭い、片足ジャンプ・両足ジャンプ・歩行や小走り・スキップ、片足膝立て座りなど、バリエーションが増していた。

動作／ポーズの優劣は、1999年・2009年とも動作優勢であった。優位な身体部位は、1999年は体幹・上肢・下肢、2009年には上肢・下肢のチームも現れた。

振付特徴は、1999年はソーラン節のニシン漁の網引きや櫓漕ぎの動きを再現した櫓漕ぎの動きや同じ動きで高低を見せる振りや力強い動きが多かったが、2009年はカノン・うねり・上肢の運動で見せる振り、連続的なジャンプ・高いリフトなどを同時にシンクロさせる手法を用いていた。

舞踊の種類は、1999年はナンバや漁師の所作を中心に、盆踊り・歌舞伎・日本舞踊の動きやエアロビクスなどを取り入れていたが、2009年はナンバや里神楽の所作・手踊り・日本舞踊・JAZZ・HIP HOPなど様々な種類が取り入れられていた。

演舞の雰囲気は、1999年は土着性を感じる力強い演舞で北海道の海を感じさせる演舞であったが、2009年は土着性のある力強い演舞・究極の和を求めた古典的な演舞・凛々しく躍動感溢れる演舞など、独創的で作品の雰囲気が異なるものであった。

隊形変化は、1999年はAチーム7回、Bチーム5回、Cチーム13回に対し、2009年はAチーム12回、Bチーム19回、Cチーム21回と2009年には変化回数が約2倍増えていた。又、1999年は整列・ズレ列が多かったが、2009年は様々な隊形が同時に展開され隊形の複合性が増していた。

役目は、1999年はAチーム3パート、B・Cチーム1パートであったが、2009年はAチーム3パート、Bチーム9パート、Cチーム10パートと、パート数が増加していた。

③総合美術について

衣装は、1999年は3チームとも鉢巻・長半纏・腹掛け・

股引き・手甲・足袋と正調ソーランの衣装をベースにしており、衣装展開はA・Bチームに1回のみ見られた。2009年はAチーム2種類、Bチーム3種類、Cチーム4種類であり、正調ソーランの衣装（法被）を用いていたのはAチームのみであった。Bチームは袴・着物、Cチームは貴族風衣装をアレンジした衣装であり、和（伝統）の衣装を工夫していた。衣装の共通点としては、3チームとも、衣装にチーム名もしくはチームロゴを数多く取り入れ、又、作品途中に様々な衣装展開がされていた。

道具は、1999年は3チームとも旗が主流であったが、2009年はのぼり･大旗･幕のような大道具や扇子･傘などの小道具が数多く用いられ、道具数も増え、又、チーム名やロゴが記載されているものが増加していた。全体の配色は、1999年はカラフルや黒紺でシックであったに対し、2009年はカラフル、赤・白・黒・紫、赤・白・金・オレンジ・緑と様々な色彩感を持たせた配色であった。

④音楽

音楽の唄の長さは、1999年はAチーム1’49”、Bチーム3’40”、Cチーム0’45”であったのに対し、2009年はAチーム1’46”、Bチーム2’18”、Cチーム1’20”と長さは変わらなかったが、曲調は異なっていた。又、2009年は3チームとも生演奏（ボーカルと太鼓）を作品に取り入れていた。

3.　考察

1999年上位入賞3チームとも、ソーラン節の海をテーマにし、動き・総合美術・音楽においても同じ傾向が見られバリエーションも少なかったが、2009年上位入賞3チームは、テーマ性が多様化すると同時に、動き･総合美術など全てにおいて多彩なバリエーションが取り入れられていた。

鳴子を持って踊ること・ソーラン節のフレーズを入れることを原則に、自分達らしさを追求し、時代と共にチームの主張が明確になっていることが考察できた。又、2009年は、「独自性・伝える力・みなぎる活力や勢い・感動」と参加者自身に焦点をあてた方針を祭り側が打ち出し、第18回YOSAKOIソーラン祭りを活気づけていた。

これらのことから、10年間で演舞構成は、複合化され独自性が明確に打ち出されていることが明らかになった。

V.　まとめ

YOSAKOIソーラン祭りの演舞は、時代の文化や流行を取り入れながら年々変容している。各チーム、現代と和（伝統）の動きを調和させ、作品のテーマに基づいた動きを選出し、独自性のある個性溢れるダイナミックな作品展開になっていた。演舞構成は、10年間の間で複合化され、独自性や創造性が増していたことが明らかになった。しかし、祭りの参加者の意識は、10年経っても変わらないものであると、参与観察の視点から考察できた。

YOSAKOIソーラン祭りは、“誰もが主役”“街は舞台だ日本は、変わる”というコンセプトがある。観客と参加者は、“見る－見られる”という関係が成立し、観客の視線はあらゆる方向から参加者に向かっている現場となっていた。そして、YOSAKOIソーラン祭りの踊りは、他の民族舞踊と違い、外側に向かって発散させる土着のエネルギー（感情の情緒表現）を打ち出す展開になっていた。

この祭りの参加者から、演舞後に観客からの拍手や声援、「ありがとうやかっこいいなどの言葉が嬉しい」というコメントを得た。同祭りは、参加者の意識を高め、今もなお“自己承認”の現場となっていた。又、多くの“仲間”と共に目標に向かう楽しさや大変さの中で、自己の存在価値を再確認する様子や仲間と感動する様子を伺えた。その他、衣装を纏うことで、「日常と違った自分や“変身”した自分を体験できた」というコメントを得た。

この“自己承認”・“仲間”・“変身”の3つのキーワードは、10年経っても、変わらないものであった。

日本の祭りは、己を隠すものもあるが、同じ祭りでも、他人の目に映る自分を確認するのは、現代社会の中で自分を認められる機会が少ないからではないかと考察できる。

多くの人々を動員したYOSAKOIソーラン祭りの

演舞構成は、現代の人々を引きつける要因を内包している祭りであると考察できた。日本各地に広がったよさこい祭りの熱狂的な乱舞は、自己表現や人々の共感の場として、その時代の文化や世相を反映しつつ益々発展するのではないかと考えられる。

今後も、YOSAKOIソーラン祭りが、地域文化を創造し、エネルギー溢れる場、参加することで生きる力を養う場として、更に発展していくことを期待したい。

引用文献

(1) 長谷川岳(1997)『講師略歴資料』 p.1
(2) YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(1998)『1998第7回YOSAKOIソーランチームオーダービデオ』ビデオジャーナリスト協会
(3) よさこい祭り振興会(1999)『YOSAKOI読本VOL』 pp.16-31
(4) YOSAKOIソーラン祭り実行委員会・普及振興会(1997)『YOSAKOIソーラン祭り1997スペシャルガイドブック』、共同文化社　P.117(北川泰斗『街は舞台だYOSAKOIソーラン祭り』、高知新聞社、1996年引用)
(5) 軍司貞則(1997)『踊れ「YOSAKOI祭り」の青春』文芸春秋　p.15
(6) 飯田舞+YOSAKOIソーラン祭り普及振興会(1996)『YOSAKOIソーラン祭り読本』すずさわ書店　p.28
(7) 朝日新聞(1999.06.18)日刊　p.24
(8) 前掲書6　p.56
(9) YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(2009)『YOSAKOI SORAN MATURI 09 公式ガイドブック』 pp.38-39

参考文献

・ 阿南透(2009)「"歴史を再現する"祭礼」慶応大学大学院社会研究科紀要26
・ 阿南透(1997)「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造」松和彦編『現代の世相・・・・・・⑤祭りとイベント』小学館
・ 遠藤綾乃(1998)「身体表現としての仏舞研究」お茶の水女子大学平成9年修士論文
・ 長谷川岳(1998)「YOSAKOIソーラン祭り 仕掛け人が語る成功の秘密(特集　北海道の運命――北海道の未来を拓く」『週間ダイヤモンド』
・ 平田利矢子(1997)「YOSAKOIソーラン祭りの参加者意識考」舞踊学会
・ 森田三郎(1968)『祭りの文化人類学』世界思想社
・ 中村孔郎(1990)『日本の子どもに日本の踊りを』大修館書店
・ 杉原葉子(2008)『熱狂!日本全国　よさこい踊り』コスミック
・ 鶴見俊輔・小林和夫(1996)『祭りとイベントのつくり方』晶文社
・ 内田忠賢(1998)「よさこい祭りの人類学」三色旗慶応義塾大学
・ 内田忠賢(1998)「よさこい祭りの人類学」慶応義塾大学三色旗報告書第2部
・ 内田忠賢(2000)「変化しつづける都市の祝祭空間:高知「よさこい祭り」」米山俊直・和崎春日『都市の祝祭100年』ドメス出版
・ 内田忠賢編(2003)「よさこいYOSAKOI学リーディングス」開成出版
・ YOSAKOIソーラン組織委員会(1999)『MONTHLY YOSAKOI SORAN 1999 6 VOL.25』
・ YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(1999)『YOSAKOIソーラン祭り1999スペシャルガイドブック』ルック
・ YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(1999)『YOSAKOIソーラン祭り参加者ガイダンス』YOSAKOIソーラン祭り組織委員会
・ YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(1999)『第8回YOSAKOIソーラン祭り参加要綱』YOSAKOIソーラン祭り組織委員会
・ YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(2009)『第18回YOSAKOIソーラン祭り参加要綱』YOSAKOIソーラン祭り組織委員会